

## 小講義要旨：行為としての聴き取り

東京大学大学院教育学研究科 能智正博

私が専門としている臨床心理学において中核に位置づけられるのは対人援助活動であり、その活動には援助対象者の声を聴き取ることが欠かせない。カウンセリングでは、クライアントがどういう問題状況にいるのかを、その声の聴き取りによって推測しようとするところから始まる。また、福祉の領域では、クライアントがもっているニーズを聴き取りながらそれに応じたサービスを提供したりリソースを紹介したりする。

しかし、そもそも「聴き取る」とはいったいどういうことなのだろうか。今回は、この一見あたりまえにも見える疑問に思いをめぐらせつつ、最近臨床心理学やその関連領域であるインタビュー研究の分野で議論されている内容を簡単にお話ししてみたい。

常識的に言って、私たちは聴き取りという行為を次のような過程だと思っている。まず話し手の中に何か話したいことが隠れていて、それがやりとりのなかで言葉の形で取り出される。それはちょうど、宝物が洞窟かどこかに隠されていて、その洞窟の扉の向こうにあるものを発見するのに似ている。そこでは、扉をこじ開けるのは聴き手の役割だが、扉の向こう側にあるものに対しては、聴き手は受動的に受け取るしかない。

しかし、臨床心理学や関連分野の実践においてはそういったイメージで聴き取りをとらえるのは不適當かもしれない。というのも、はじめから言いたいことが語り手のなかではっきりしているとは限らないからである。理由のよくわからない不安にかられている人もいるし、自分が何を求めているのかがわからない人もいる。聴き取りとは、そうした状況も含めて、語り手と向き合う行為である。

当日は、そうした聴き取りに対する一般的な見方を相対化しつつ、五感を通じての聴き取り、働きかけとしての聴き取り、相互行為としての聴き取り、相互の発見としての聴き取り、などといった切り口で、「聴く」という行為の諸相について考察していく。そこから、「聴く」ことに対する新たな視点や技法のヒントが見えてくれば幸いである。